

研報 07-5

第5回HRC研究報告会外部評価シート

開催 場所	本学・4号館・5F	開催 日時	平成19年12月1日(土) 13:00-16:30
外部評価委員 所属・職・氏名	東京工業大学・大学院・電子物理工学専攻 教授・岩本光正		
総 評			
<p>4つのグループが、個々の目的達成に向けて熱心に取り組んでいる様子がうかがわれた。しかし、HRCの目的の一つである分野横断的な繋がりによる研究連携や教育取り組みには乏しいと感じた。4つグループは広範な領域を包含しているので、研究の連携は難しいかもしれないが、学生の教育という視点から連携的教育の提案と実践があっても良いのではと思われた。</p>			
グループ1 評価			
<p>NMRを用いた難しい研究ではあるが、M2学生の教育をしながら目標に向けて努力している様子がうかがわれた。しかし、NMRという装置がどんな意義があるのか、所属学生がいつでも説明できるように教育しておきたい。それにより、学生の興味も広がり、もっと裾野の広い液晶の研究に繋がるのではと感じた。実空間 [ダイレクタ空間分布] と k 空間「周波数」の2つの立場からの見方は、工学部学生には必須であるから、研究を推進しながら教育しておきたい。なお、89.1度と89.9度という数値に真偽性を感じた。液晶物性や界面アンカリングエネルギー等も含め、突っ込んだ議論を今後期待したい。</p>			
グループ2 評価			
<p>解析の複雑さはあるが、着実に研究を推進しているとの良い印象を得た。しかし、反磁界係数の計算などの解析結果が、研究の発端となった等価磁気回路の不具合に反映されるのかわかると良いと感じた。また、このような研究を推進にあたり、学生の教育はどのようにして行われるのか、その一端がわかるともっとよいと思われた。</p>			
グループ3 評価			
<p>学生の発表は熱心であり、好感が持たれた。しかし、研究の方法はルーチン化されている様子であり(装置が整っている様子)、「銅鉄主義」の気配も濃厚である。企業向けにはこの研究は素晴らしいと思うが、大学の特徴である研究推進にかかる物理があるかの点で疑問も沸いた。学生に、徹底した「ものづくり」の根性を教えることはできていると感じたが、反面、それを支えるサイエンスのありようも研究を通じて教育できているのだろうかと感じた。</p>			
グループ4 評価			
<p>話は、聞いている限りは面白い。反面、計測技術とコンピュータ処理により、匠の技と素人の違いの調査をして、皆が感じていたことを単に数値化したに過ぎないとも思われ、研究の目標と到達点が明確でないと思われた。そのため、研究を論文のような形でまとめるのは難しいだろうとの印象を持った。なぜなら、「品」といっても人によってその感じ方はいろいろであり、「品」の基準が明確でないからである。匠の技がなす技術を普遍化するためのソフトの研究なのか、計測技術の研究なのか目的を明確にしたい。</p>			